



未来創造型教育

～ 総合的な学習の時間を軸としたカリキュラムの展開 ～

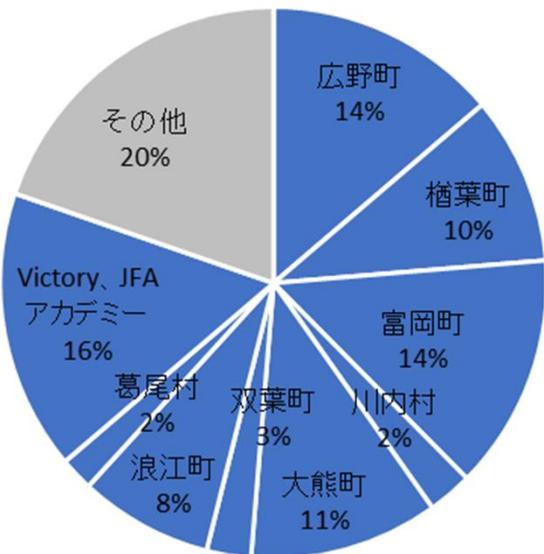
平成28年2月23日
福島県立ふたば未来学園高等学校 副校長
南郷 市兵

1 ふたば未来学園の概要

○ ふたば未来学園の概要

- ✓ 福島第一原子力発電所事故によって、一時は全町村に避難指示等が出された地元双葉郡の教育長が中心となり、県・国・大学等と協議し、県立中高一貫校の設置を柱とする「福島県双葉郡教育復興ビジョン」を決定したことを背景として、平成27年4月に開校。
- ✓ 震災と原発事故という、人類が経験したことがないような過酷な複合災害によって、解決困難な様々な課題に直面したことを踏まえ、建学の精神を「変革者たれ」とし、「解のない課題」を乗り越える力を身に付けることを目指して、徹底的なアクティブ・ラーニングをカリキュラムの中核に位置付けている。
- ✓ 総合学科として、主に大学進学に対応した科目を選択する「アカデミック系列」、農業、商業、福祉に関する科目を選択する「スペシャリスト系列」、スポーツ科目を選択する「トップアスリート系列」を置く。
- ✓ 現在は連携型中高一貫校として、双葉郡8町村の全中学校と連携している。平成31年度には併設中学校を開校する。

○ 生徒の出身地（H27入学生152名）



- ✓ 80%の生徒が原発事故による避難で県内外に離散した双葉郡出身。
- ✓ 避難で転校を繰り返し、大きな喪失経験の中、力を発揮できずいたり心のケアが必要な生徒もいたりするなど、家庭環境の変化も含め厳しい状況にある。
- ✓ 一方で、ふるさとの地で、友と共に再出発し、見通しの見えない地域復興を担おうとする意欲をもつ生徒が多い。

○ 双葉郡内の高校の状況



Victory及びJFAアカデミーは、震災前より「双葉地区教育構想」に基づき、富岡高校を中心として実施されていた、バドミントン及びサッカーの人材育成の取り組み

2 ふたば未来学園で育てたい力（人材育成要件・ルーブリック）

7 July 2015 Ver.



全教員でルーブリックを設定。学校をあげて取り組むために自分たちの視点・言葉で定義することを重視した欠かせない出発点。指導の重点の設定、授業の展開、学習評価、学校評価等をルーブリックと関連づけながら展開することを目指している。

創造
協働

学力概念	No	資質・能力・態度(まとめと)	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
知識 Knowledge "What we know"	A	社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力をつけながら、世界・社会の状況の変化やその課題を理解するための知識を身に着ける。	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	地域の復興に向けた課題や、目の前の課題についての基礎的な知識を得る。	環境・エネルギー問題など持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。	社会の課題について、習得した知識を深堀し、周辺情報や関連情報を集め理解する。	社会の課題について、目の前の課題と関係する知識を俯瞰してつなげ、人に説明できるレベルまで理解する。
	B	英語活用力 英語を使つてのコミュニケーションができるようになる。	英語でコミュニケーションをとうとうとする関心・意欲・態度を持ち、自分のことについて英語で簡単に伝えられる。	自分の興味関心のあることや、地域について英語で説明できる。	地域や研究内容について、原稿を元に英語でスピーチし、簡単な質疑応答ができる。(CEFR B1レベル)	地域や研究内容について、即興で英語でスピーチし、意見交換ができる。(CEFR B2レベル)	地域や研究内容について、ストーリー、データ、事例などを交えながら英語で説得力を持って主張し、議論できる。(CEFR C1レベル)
技能(スキル・コンピテンシー) Skills "How we use what we know"	C	思考・創造力 物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができる。	与えられた情報を整理できる。	目の前にある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げて考えることができる。	メディアを活用して情報を集め、情報を分析・評価・活用しながら課題を発見したり設定できる。	現実と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の事実について批判的に考えることができる。	未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれずに創造的に考え、新たなアイデアを生み出せる。
	D	表現・発信力 どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる。	自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。	突然指名されたときでも億せず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。	ICTを活用したり、データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考えながら分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、熱意とストーリーを持って腑に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることができる。
	E	他者との協働力 異文化・異なる感覚の人・異年齢等乗り越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。	集団や他者の中で、決められたことや指示されたことに一人で取り組むことができる。	集団や他者の中で、自分の役割を見つけ、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。	集団や他者の中で、他者の良さに共感し、新たなものを取り入れながら、共通の目標に向かって活動を進めることができる。	集団や他者の中で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を築くことができる。ICTを活用して協働を促進することができる。	文化や国境を越えて、社会を変革する行動にうつし、互いに高めあう同志としての関係をつくれる。
	F	マネジメント力 自分や組織での取り組みを計画性を持って進めることができる。	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を待たず、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	全体にとって必要な作業を見出し、自分の作業に優先順位をつけて、複数の課題に同時に対処することができる。	作業の繋がりが、全体スケジュールを意識し、チームやメンバーで作業を適切に役割分担できる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。
人格(キャラクター・センス) Character "How we engage in the world"	G	前向き・責任感・チャレンジ 自分を意味ある存在として考え自信を持ち、課題解決のために自分の役割を見つけ、全力で取り組み、決してあきらめず遂行できる。	自分を意味ある存在として考え、物事をポジティブに捉えることができる。	自分に自信を持ち、目の前の課題を自分のこととして好意的に捉えて、主体的に取り組める。	集団や他者の中で、自分の役割を見つけ、すぐに解決方法が分からなくても考え続けることができる。	困難にぶつかっても自分の責任を果たす努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果たし、失敗してもその失敗を糧とできる。
	H	寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようすることができる。	集団や他者の中で、他者を気づかえる。	集団や他者の中で、相手の立場や考えを想像し、共感できる。	集団や他者に対して、思いやりをもって行動し、周囲の幸せを考えることができる。	考えの違う他者に対して、ユーモアを持って接するなど、他者との違いを楽しめる。社会や環境の変化を前向きに捉えられる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分や社会をより良くしていくための重要なものと考えて受け入れられる。
	I	能動的市民性 社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。	所属する集団の一員としての自覚を持つ。	社会の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けようとする。	社会をより良くしようと、社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる。	社会に貢献しようとする意欲と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼそうとする。	社会・未来を良くしようとする志を持ち、自分自身の意見を他者に真剣に語ることができる。
自らを振り返り変えていく力(メタ認知) Metacognition "How we reflect and learn"	J	自分を変える力 自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動に繋げることができる。	自分を向上させるために、自分自身で目標を立てることができる。	自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を見つめることができる。	自分の目標に近づく方策を考え自ら行動することができる。	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で見直して反省しながら、学び続け、次の行動につなげて取り組むことができる。	社会の中での自分の役割や意義を俯瞰して考え、自分の目標と関連づけて大局的に行動できる。

自立

3 現在の取り組み状況

○ 地域の復興の課題を見つめる

1学年前期の探究の単元で、生徒たちは7名のグループに分かれ、町役場、商店、東京電力等を訪ね、地域の現状を調査し、復興に向けて地域が抱えている課題を分析し、台本という形で整理して演劇で表現。

演劇制作のポイントは、「立場や考え方の違いによる難しい課題をそのまま表現する」こと、そして「全国や世界の人に福島を復興の課題を理解してもらえ、共感してもらえ部分を見つけ出し、広げていく表現をする」こと。30時間弱の授業時間、生徒たちは悩みぬきながら表現を創り上げた。多面的に復興の課題を見つめ、自らの言葉で語ることは、今後の学習の土台。

2・3年次の探究では「原子力災害から復興街づくり」や「再生可能エネルギーを生かした街づくり」「風評・風化に立ち向かうメディア制作」等、生徒自ら復興のプロジェクトに取り組んでいく。



○ 海外研修・世界への発信

1学年の代表が夏期休業中に、チェルノブイリ原発事故の被害を受けたベラルーシを訪問し、前述演劇を英訳して演じた。また、地元広野町で行われた国際フォーラムに登壇し、海外研究者や地域の方々に向けて、演劇を披露するとともに地域の復興に向けた意見交換を行った。

1月にはタイとドイツを訪問し、再生可能エネルギーを生かした持続可能な街づくりをつぶさに視察したほか、現地の大学生に双葉郡の現状と自分たちが目指す復興の方向性をプレゼンテーションし、交流した。(SGHとしての取組)



海外からの来校者も多く、夏にはジーナ・マッカーシー米国環境保護庁長官を迎え、意見交換を行った。

○ 全国の地方創生先進事例からの学び



OECD東北スクールの後継事業である「地方創世イノベーションスクール2030」への参加、島根県海士町の隠岐島前高校生を迎えての交流

○ 各教科でのアクティブ・ラーニング



授業では頻りにICTを活用。ワールドカフェ方式の数学、即興演劇を取り入れた英語等、各教科で積極的にアクティブ・ラーニングを展開

3 「総合的な学習の時間」の探究を軸とした、カリキュラム・マネジメント



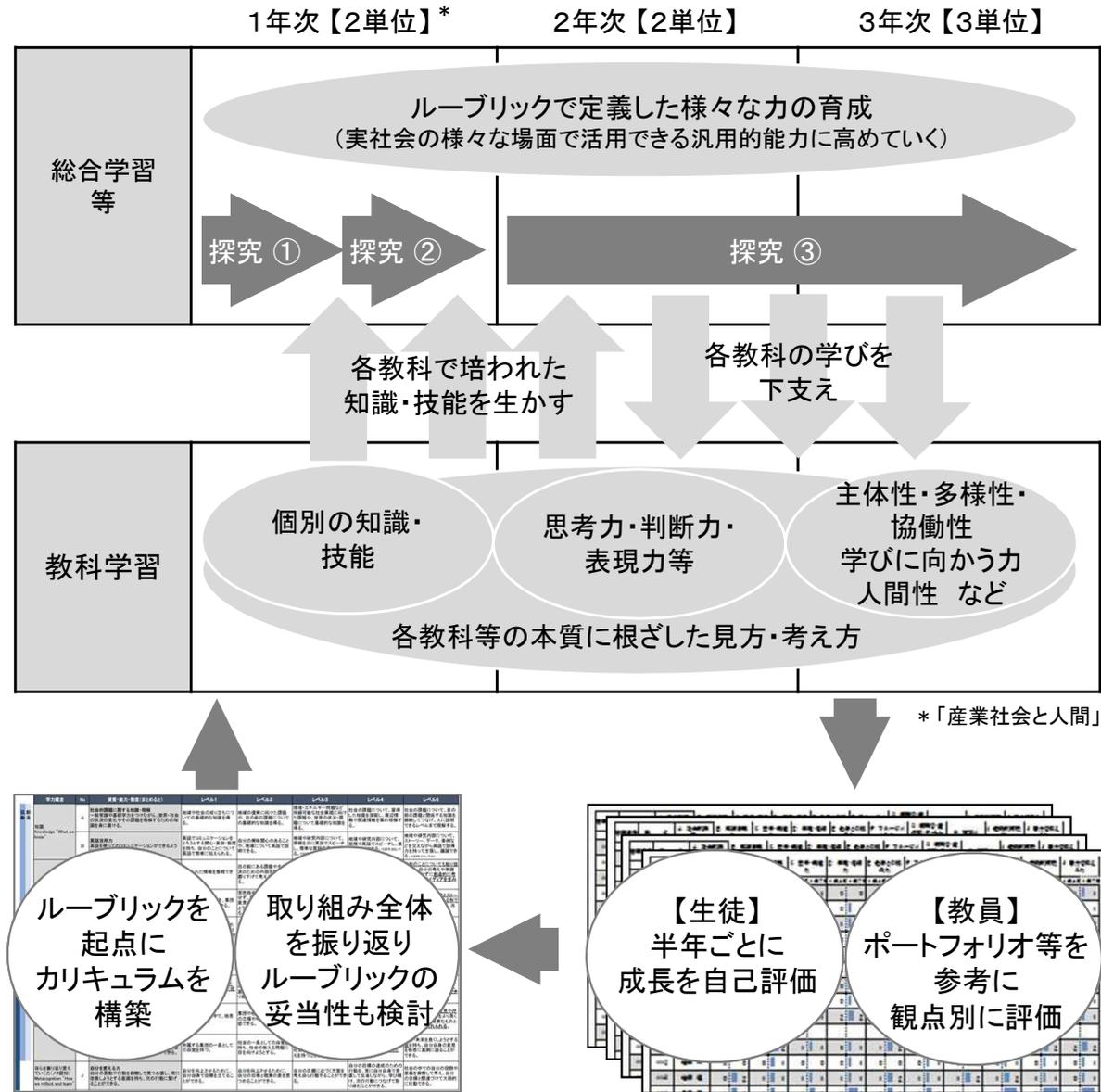
○ 汎用的能力に高めるための カリキュラム全体の軸となる総合学習

- ✓ ルーブリックで定義された資質能力は、各教科の学習のみで培われる知識・技能には収まらない、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力。OECD東北スクールの成果※を踏まえると、これは実社会における横断的・総合的な問題解決に主体的に取り組み、様々な挑戦や失敗の経験も積まなければ身に付かない。
- ✓ カリキュラム全体で汎用的能力に高めていくための軸となる時間として、総合学習等の合計7単位を位置づけ。卒業までの3年間で3回の探究のプロセスを経験する。

○ 総合学習での探究と 各教科のつながりを意図的に設定

- ✓ いずれの探究においても、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的なアクティブ・ラーニングを徹底的に実践。この中で、各教科で身に付いた、ものの見方・考え方、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力や人間性などが発揮され、汎用的な能力が高まっていくことを目指す。
- ✓ 逆に、カリキュラムの軸となる探究があるからこそ、各教科の学習の意欲が喚起され、各教科の学習活動が確かに下支えされていく。また、内容面に関する知識も、各教科において発展的に学習し、深められていく。
- ✓ 総合的な学習の時間におけるアクティブ・ラーニングと各教科のつながりを意図的に生み出すことで、各教科の学習も表面的な知識や技能の習得にとどまらない、アクティブ・ラーニングにより深い学習となる相互作用を期待。

- ✓ **全教員で意識を統一するルーブリックの設定を起点にしつつ、総合学習を軸としたカリキュラム・マネジメントを土台として、学校全体で取り組む構造が重要。**



ふたば未来学園におけるカリキュラム・マネジメント

※ OECD東北スクールの成果を分析すると、実社会での実践が生徒の大きな成長へとつながったことを表している。ルーブリック評価における「成長要因」の生徒の自己評価上位回答は下記の通り。
 1. 他地域の生徒との交流(71%) 2. 異学年の生徒との交流(56%) 3. 地域の将来・未来に対する議論・活動(54%)
 4. 企業・団体への訪問・プレゼン 5. 引率教員との交流 6. 企業等の支援者との交流
 7. 講師・有識者との交流 8. 地域コミュニティとの交流 9. 役割に対する責任 10. 大人・子供対等での議論